

令和6年度 東京都立青梅総合高等学校 定時制課程 学校経営報告

東京都立青梅総合高等学校長

川口 元三

1 今年度の取組目標と方策

【 「やり抜く力」の育成と「新しい日常」を意識した取組の推進 】

(1) 教育活動の目標と方策

① 学習指導（自分で「考えさせる授業」推進）

ア 「あおていスキル」の定着を高め、授業や行事で主体的な取り組みが向上した。

イ 義務教育内容を含め、基礎・基本を確実に定着した。

ウ 個に応じた学習指導を推進し、「やり抜く力」育成を意識した教育実践を図った。

エ 全日制・定時制の枠を超えた相互授業見学を推進し、そこで得られた改善点を生徒に還元することで、教員の授業力向上に対して組織的に取り組むことができた。

オ 特別支援・自立支援について、SC、YSWと連携して生徒一人ひとりに組織的に対応した。

(自己評価) 教員それぞれで「考えさせる授業」のスタイルを築き始め、生徒にも定着してきた。「やり抜く力」の育成では、授業の他、部活動、生徒会活動において教員が意識したことにより、生徒が仕上げ、形にする取り組みが増えた。生徒支援委員会はスクールカウンセラーとユースソーシャルワーカーの勤務日を揃えることにより、生徒の情報共有がよりスムーズに行うことができ、校内研修の充実にもつながった。

② 進路指導（個に応じた指導の推進と地域連携）

ア 総合的な探究の時間で「自分の未来」を考えさせる指導を充実させた。

イ 昨年の成果を基に進路ガイダンスを行い、生徒が進路相談しやすい環境を整えた。

ウ 多様な進路希望に対し、個々の生徒の実状に合わせて粘り強く指導した。

エ 地元商工会議所等と連携して、生徒理解に基づいた就職先の開拓を行った。

オ 面接指導は全教員が関り、個に応じて粘り強く対応した。

(自己評価) 進路活動のスタートが遅い生徒が多かったが、粘り強く相談、指導を行った結果、就職希望者は100%内定を勝ち得た。進学希望者にも最後まで指導を続け、100%合格を果たした。退学する生徒に対しても最後まで指導を続け、外部単位を修得させて進学へつないだ。

③ 生活指導・安全指導（規律ある学校生活の推進）

ア 授業中の規律を明示し、全教員が粘り強く生活規律を守る態度を育成した。

イ 学校カウンセリング機能を充実させ、生徒支援委員会で情報共有することにより、いじめの未然防止につながった。

ウ 校内研修を通して教職員同士が体罰に対して相互に看過しない体制づくりを継続できた。

エ SC、YSWによる校内研修を通し、SOSの出し方教育を推進した。

オ 生徒による給食PRを推進し、喫食率の向上に努めた。

カ 校則については、生徒会と教員による懇談会を開催し、学校の実情や生徒の意見を出し合ったことにより、生徒の規範意識が高まった。

(自己評価) 自転車ヘルメット着用は、呼びかけ当初100%であったが、声掛けの継続が必要である。今年度、特別指導は20件でと昨年より8件増加したが、いじめ0、体罰0であり基本的には落ち着いた環境である。学校外での問題行動が課題である。

④ 特別活動・部活動（「やり抜く力」の実践的育成の場）

- ア 各行事で、生徒に事前に粘り強く話合わせるにより、生徒の自立心が高まった。
- イ 部活動は、生徒の目指す目標を尊重し、「やり抜く力」の育成の場となった。
- ウ 生徒会中心に制作活動を行い、生徒のボランティアマインドを育成した。
- エ 体罰や不適切な言動のない指導を徹底し、部活動で生徒が主体性に活動するようになった。
- オ 学校2020レガシーとして、パラスポーツへの取り組みを推進する。

（自己評価）文化祭では飲食店やゲームを出店し、多様な生徒がそれぞれの活動場面を見つけることができた。体育祭では他者を応援する姿が活発に見られ、協働にもつながった。男子バスケットボール部が2年連続全国大会出場を果たし、初戦を勝ち抜く等、部活動が一層活発化する波及効果を見せた。また、生徒生活体験発表会でも、全国大会に出場し入賞する快挙を達成した。パラスポーツでは、ボッチャが定着した。今後は、外部に出たボランティアを推進していきたい。

⑤ 心身の健康づくり（健康生活への組織的対応の推進）

- ア 教員が日常的に生徒の状況を把握し、必要な情報を共有するとともに、心身の健康づくりと早期ケアに努めることができた。
- イ スクールカウンセラーとの情報共有や役割分担を相談できるようになり、教員が抱え過ぎない相談体制・カウンセリングマインドを構築できた。
- ウ 生徒支援委員会が機能して、特別な支援が必要な生徒への共通理解と個別案件に対して組織的に対応できた。
- エ 「TOKYO ACTIVE PLAN for students」に基づいて授業、部活動、行事を通して、心身の健康づくりを推進できた。
- オ 保組織的な相談体制を充実させ、自他の生命の大切さを実感させる取り組みが推進できた。

（自己評価）休みがちな生徒には保護者と連携を密にする等、心身の健康づくりについては、きめ細かく対応できた。保健室の場所や自習室を工夫することにより、不安定な生徒を支え続けて卒業までつなげたほか、いじめの未然防止ができた。転入してくる生徒のケアが、喫緊の課題である。

⑥ 募集広報活動（情報発信・提供の強化と地域連携）

- ア ツイッターやホームページの随時更新が保護者、中学生、地域に浸透し、本校の教育活動の理解が深まった。
- イ 学校説明会や合同説明会等では、「都立高校の魅力向上に向けた実行プログラム」に基づき、体験活動や生產品紹介を通して総合学科定時制の魅力が伝わった。
- ウ 中学校訪問を積極的に実施した結果、多様な受検生が集まった。

（自己評価）今年度も教員が中学校訪問を実施し、本校の魅力を教員自らが語るにより理解が深まった。一次募集での受検生は32名と減っているが、全員本校を第一志望で受検している（昨年度43名）。地域から期待される定時制として、落ち着いたある学校生活と進路実現100%を継続していくことが必須である。

⑦ 学校経営・学校運営（連携と育成、体制の確立）

- ア 学校支援センターとの連携を密にし、職務の効率化を図り学校経営の基盤を安定させた。
- イ OJTを活用して各職層の人材育成を図り、課題解決に取り組む活気ある校内体制を推進できた。
- ウ 生徒、保護者、地域住民からのアンケートを基に「期待に応える学校づくり」を再検討した。
- エ 管理職が率先して「ライフ・ワーク・バランス」を示し、休暇取得を推進した。

（自己評価）人材育成の結果、若手教員が積極的に学校運営に関わることを希望するようになり、組織的に動きやすい環境が整った。主任教諭が少ない中、OJTが日常的に行われ、主幹教諭を中心組織的に機能するようになってきている。

(2) 次年度以降の課題と対応策

- ① 「やり抜く力」の育成 教育活動全体で困難にあってもくじけない勇気を育成する。
- ② 「考えさせる授業」の一層の推進 相互授業観察の推進と教育活動全般で仕掛けていく。
- ③ 「あおていスキル」の浸透 ルーブリックの活用し自ら能力の向上を図らせる。
- ④ 授業規律の徹底 全教員が同じ判断基準をもって指導することを継続させる。
- ⑤ 読書活動の推進 教育活動全体で図書館活用を意図的に推進させる。
- ⑥ 教職員のデジタル技術の活用力向上 校内研修の充実と全日制との交流を一層推進する。

数値目標と結果

	目標	結果
○ 考えさせる授業の実践	生徒アンケート肯定的評価80%以上	90.8%
○ 就職内定率	100%	100%
○ 学校満足度	生徒・保護者ともに肯定的評価80%以上	生徒 90.7% 保護者 85.3%
○ 図書館貸出冊数	総計400冊以上	461冊
○ 自立支援にかかる研修会	年3回以上	3回
○ 特別支援にかかる委員会	年30回以上	26回